

第5回阿賀野市観光戦略プラン推進・評価委員会会議録

- . 日 時 平成26年1月23日(木)午後1時00分～3時00分
- . 会 場 阿賀野市役所 第1多目的ホール
- . 参 集 者 審議会委員：川上委員長 大堀委員 斉藤委員 山本委員 鈴木委員
北見委員 百都委員 権瓶委員 石塚委員
事 務 局：飯野課長 五十嵐課長補佐 片桐観光政策監 田中係長
斉藤主任 小林主任 以上15名

. 内 容

1. 開 会

(事務局) 定刻となりましたので第5回阿賀野市観光戦略プラン推進・評価委員会を開催いたします。はじめに川上委員長よりあいさつをお願いいたします。

2 委員長あいさつ

明けましておめでとうございます。新年でお忙しい方もいらっしゃると思いますが、ご出席いただきありがとうございます。今日の会議では皆さまから忌たんのないご意見をいただき、実りある会議になるよう進めていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

(事務局) この4月から、事務局も異動による入れ替えがありましたので自己紹介させていただきます。その後、皆さまの方からも自己紹介をお願いしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

～ 自己紹介 ～

(事務局) 本日の会議では、プランの5年間の進捗状況について、皆さまから忌たんのないご意見をいただきたいと思います。その後3月にもう一度会議を開催させていただき、その時に本日の皆さまからのご意見に基づいた素案をお示ししたいと考えています。

3 議 題

(1) 平成 2 5 年度観光戦略プラン進捗状況について...事務局より一括説明

質疑応答

(委員) 白鳥美人のアンケート報告の補足をさせていただく。パンフレットを見て各お店に行く方がいるようだが、お店の方も忙しいということで白鳥美人を出せない場合があったらしい。白鳥美人を知らない人が多いということであるが、チラシなどによりPRしていききたい。「白鳥美人て何?」という質問もあるが、白鳥の白をイメージして、健康志向をPRしていると説明している。現在、リズムハウスで一番多く提供されている。これからもイベントなどで宣伝していききたいと思う。

(委員) アンケート結果では、瓢湖と五頭温泉郷が一番という結果であった。これから、どうやって戦略を考えて行ったらいいか。また、いろんなイベントがあるが阿賀野市で力を入れるイベントをいくつか決めて、宣伝していったらどうか。

(委員) 本日の報告を見ても、着実にいろんなイベントを行なっていることが分かる。これからは最終集客目標はどれくらいなのか?年間何百万人というふうに仕掛けていくことが大切。また市にどれだけお金が落ちるのか、来る人たちの分布図を考えること。富士山のように山が高くなり裾野が広がるイメージで、AからDまでのランクを付けてみる。家族のようによく訪れる人、年に一回来る人などランク付けしてデータベースを作る。阿賀野市のファンクラブのAランクの人たちは、観光大使のような形で情報発信のハブ(中枢)になる。いろんなツールを投げていれば人数は増えるかというところではなくて、人間のネットワークをどうつないで集客していくか、総合的なイメージを作っていく必要がある。イベントに来た人たちの個人属性データがとれて、それを商工観光課がネットワーク化していく。ランクによりその人たちへ情報提供をしていく。トータルで計画し戦略を立てていくこと。それがないと、魚をとるのに餌だけばらまいていることになる。

(事務局) 5年前に作ったプランは今年度で終了するので今後新しい計画を作る。委員のおっしゃる通り、目標管理をしていかななくてはならないと考えている。本日いただいた意見を参考に、次のプランを作っていきたい。

(委員) 例えば、阿賀野市出身の著名人の人たちをネットワーク化してどう使っていくか。その人たちが市に対してどう情報発信してくれるか、また、各分野のもの申す人たち

や阿賀野市を評価する人たちのマップを作って、どういうふうに情報発信してもらうか、住民やマスコミなどを体系的に図にしてどういうネットワークを作っていくか、どういう人が来ると、どういう反応が起こるか、計画を立てること。そうしていくと、受け皿と来る人がアンマッチを起こさない。お客様をどう誘導していくかを考えることが大切。

(委員)4月からのディスティネーションキャンペーンは、観光協会として具体的な取り組みは考えているのか。

(事務局)9月の商談会で各旅行会社に阿賀野市の提案をしてきた。県の観光協会もホームページ等を通じてPRすることになっている。主なものとして、五頭自然学校のプログラムを紹介、五頭温泉郷に宿泊もしていただき、各種体験をしてもらうコースを提案している。

(委員)JRのディスティネーションキャンペーンでは、何を売っていくのか、目的をはっきりさせないと、ただ県の行事に参加するということだけではだめだと思う。五頭温泉郷、瓢湖など、県の観光協会とタイアップして、具体的な売り込みを進めていかないといけない。先回のディスティネーションキャンペーンでは、観光協会、旅館協同組合それぞれでこういうことをやります、という着地型のものを提案したが、今回はそういったものがないのか。

(委員長)安田地区であれば瓦ロードとか、水原地区であればまちあるきとか、いくつか提案している。その期間中にお客さまに「こんにちは」「ようこそ」と、市内をあげて声かけ運動するなどというのが、原点であると思う。

(事務局)県では、ディスティネーションキャンペーン開催にあたり、このようなメニューを、これくらいの金額で提供できるという情報も求めている。阿賀野市の場合、この期間中にどんなイベントを行なうかという、昨年は五頭温泉郷に泊ってもらって、ノルディックウォーキングを体験してもらうというメニューを提案した。今回は、五頭山麓、温泉郷、瓢湖をメインとし、DCガイドブックではそこを前面に出して宣伝したいと考えている。ここに来てもらえればこういう体験ができるという具体的な提案をしている。

(委員長)ごずっちょネットとはどういうものか。

(事務局)主に阿賀野市の特産品を紹介し、ネット販売をしている。

(委員長)最近、ごずっちょの商品はどこへ行けば買うことができるかという声を聞く。

このごずっちょネットではいろいろ販売しているようである。

(事務局) ここへ行けばごずっちょの商品を買うことができるという場所があったらいいという意見もいただいているが、現在は、農業歴史資料館、瓢湖の白鳥観察舎等、個々で扱っている。一か所にまとめるということも今後考えていく必要があると思う。

(委員) 以前、ラムサール条約登録は商工観光課が主体で行ったと思うが、その結果の考察はしているか。その後どれだけ誘客があったのかなど。

(事務局) ラムサール条約登録後にどれだけの効果が出ているかというご質問であると思う。これについては現在手元に資料がないため、次回、お示ししたいと考えている。今回の白鳥おじさんの復活で効果は出てきていると思う。これだけの住宅街のなかにある湖に白鳥やかもがあれだけ多く来るということを発信していく必要があると思う。

(委員) ラムサール条約登録は水原の商工会が中心だったのではないか。

(委員) 観光協会としてのきちんとしたスタンスがないと伸びていかないと思う。

(事務局) 観光と環境保全とは相反するものもある。白鳥に餌をやるにしても白鳥を守る立場からすると、自然のままがいいのではないかという意見もある。しかし、ラムサール条約を結んだことは素晴らしいことなので、これをもっと発信していくことが行政として大事ではないかと思う。

(委員) これはとても重要な部分で、自然を守ることと、人間がお金を稼ぐという、相反することがおきた場合、それをどう結びつけるかが観光に一番重要な部分。旭日山動物公園が有名になったのは、人間と動物の接し方について、動物園が工夫したことである。今までは珍しい動物を見て帰る、そうすると2回目は来ない。この動物園はリピーターがとても多い。動物の生態を上手く生かした形で見ていくということが大切。これを里山思想という。自然を放置したままでは自然は崩壊してしまう。里山思想というのは、人間が手を入れて自然を生かしていくこと、グリーンツーリズムの考え方がそこにあると思う。観光客も白鳥の自然生態系を学ぶことができる。また来たいと思う。しかける側が白鳥の自然体系を良く理解してどう体験してもらうか、どこを見どころにするか、朝と夕方を見どころにするとか、そうすると泊って見ていこうとか、瓢湖の生態系を仕掛人がよく勉強して、専門家と議論しながら、地元の人たちが潤いながら自然を育てられるかが大切。今、我々はうなぎの養殖、うなぎ川の保存ということをしている。大学の先生方とうなぎの養殖をしている組合と、パルシステムで研究会を作っている。このような取り組みでうなぎ

はますます売れる。スローガンは「獲らなくては守れない」。うなぎをそのままにしておいたら必ず絶滅する。利害関係者と一緒になって保存する。どうやったらうまく共存できるか、知恵を出し合っていてほしい。そう考えていくと、ディスティネーションキャンペーンで、瓢湖を取り巻く人々とのイベントのようなものを行ない、白鳥の研究の発表などをやるのも方法。そういうふう積極的に地域を守っていく観光のあり方を考えていくと、若い学生、高校生、中学生もまきこんでそういう仕掛けを作っていくと面白くなっていく。観光協会のスローガンが、ツーリズムの思考でうまく仕掛けられたらいいと思う。

(事務局) 瓢湖は、日本で初めて餌付けに成功したということでも売っているが、瓢湖の白鳥は周りにあるあれだけの田んぼの餌を食べにきている。雪が降ると白鳥の数は激減するが今年はあまり積もらないので、3000羽から4000ほどで推移している。田んぼにいる白鳥を見ても感動すると思う。白鳥の飛び立ち、着水もコースがあるので、そのポイントを宣伝していくのも効果があると思う。

(委員) ラムサールというのは、もともとは水辺に人間が住んでいるので水辺を守るということと、もうひとつは、野生の沼地を守るのではなく、人工物であっても、それが共存する地域を、人間の知恵によって保存していこうという考え方である。ラムサールのひとつに沖縄のサンゴ礁の地域がある。サンゴを保存するために、旅館業の人たちがそこを守る運動をしている。サンゴを獲ることが制限されているために注意深く海へもぐる理解のあるダイバーなどの観光客、ネイチャー体験など組織されたリピーターが増えた。地元の小さなダイビングショップなどが繁盛している。ある種の知識と理念に基づいた仕掛人たちが観光をリードすることが大事だと思う。阿賀野市では、田んぼを守ることがその一つとなる。瓢湖と有機農業と組み合わせて、資源にしていくといいと思う。

(委員) 竹久夢二の作品が市に寄贈されたということだが、今後どのようにしていくのか。

(委員) 吉田東伍記念博物館で管理している。保存が可能な空調施設がある。

(事務局) 二瓶コレクションを観光に、というお話で美術館を造り観光につなげた方がいいという話について、代官所の隣にある農業歴史資料館のガラス張りの展示コーナーを使って誘客につなげたいという提案はしている。空調、光などの管理が大事であるとのこと。吉田東伍記念博物館はその機能がある。

(委員) 温泉地に行くと、美術館に寄って帰るというコースをとっているが、阿賀野市には美術館がない。吉田東伍記念博物館もいいところなのだが、市民の人たちもあまりわ

からないという声を聞く。宣伝力が必要なのでは？新潟日報の下越版に、阿賀野市があまり出ていない。なぜ阿賀野市は外の地域に比べて出ないのかという市民の声もある。載せてもらうような努力は大事である。今回の竹久夢二展も知らない人が多かったように思う。

柏崎のグルメグランプリに行った時も、サントピアワールド、ヤスタヨーグルトは知っているが他は知らないと言う。阿賀野市がどこにあるかということも知らない、観光協会です、確実に宣伝していくことも大事。

（事務局）市役所でも、新潟日報をはじめ、記事を掲載してもらおうと努力はしている。商工観光課に限らず、全庁で、何か情報があればどんどん発信し、取材してもらうようにという取り組みはしている。

（委員）例えば、情報発信力がある、退職された名誉教授などを代表として、大学の阿賀野市分校などと名前を付けて、そこで観光協会や旅館組合などの若手の人たちを集めて、歴史を勉強してもらうという方法もある。吉田東伍はすごい面白い人である。けれど地元の人ほとんど知らないと思う。「よそ者 若者 バカ者」というが、変わった人がここに入入りして情報を発信すると、そのネットワークは広がっていく。そういう人によって遠くからでもやってくる。人々に人気のある、目立つ人に、その人の使命感をつかまえて、どう情報発信してもらうかということで情報発信力が全然違ってくる。また、白鳥美人について、それだけだと何のことかわからないので、「米粉めん」を付けるといい。パルシステムも「生協のパルシステム」と言わないとわからない。自分たちは分かっているもよその人は分からない、よその人を味方につけること、また、実際に動く市民の人たちでアイデアを出し合っていくことが大切。

（委員）竹久夢二展は全国の人が来てくれた。新聞でPRしてくれたからと思う。竹久夢二のことを若い人はよく分からない。先々を見越して、今のような考えでやっていかないとならないと思う。

（委員）これから、団塊の世代が65歳以上になる。もう一回ロックをやろう、絵を描こう、歴史を勉強しようということになると思う。勉強し直したいという知的欲求がある、お金も持っている。吉田東伍のようなマニアックなものはブームになると思う。

（委員）今、ホームページで情報を見たりする人が多いが自分はそういうことをしない、また、時間に余裕のある60代、70代の人たちはインターネットの操作をできる人たちばかりではないことを考えると、ネットは確かに便利ではあるが、目にした人でなければ分からない。そこで、瓢湖や温泉を訪れた人が、もう来たからいいやということではなく、そこで満足してもらうことで、今度はその人が宣伝広告になることができる。例えば、一度

来ていただいた方には証明書のようなものを出して、次に来ていただいた時には特典があるとか、 歳以上の方には特定の期間だけ粗品プレゼントなど、あるいは女性限定とか、来ていただいた方が、帰ってから広告になってくれるような仕掛けを考えていくことが大事と思う。

（委員）先日、水原の食堂のかつ丼が放送されていた。そういう話題性あるところも参考になると思う。

（委員）昨年、瓦ロードフェスティバルを開催した。天気も良く、入場者数も多かった。フェスティバルの他、瓦組合で表札をつくり、それを商品化しようと考えている。26 年度も、フェスティバルを実施する予定。瓦ロードには、途中、絵付け体験できるところもある。

（委員長）二次交通の問題がある。新潟空港から阿賀野市へ、また新潟駅から阿賀野市へという時の公共機関について考えていかななくてはならない。

（委員）旅館の方では、現在は組合でなく、個々の旅館で送迎をしている。

（事務局）ディスティネーションキャンペーンの時もそうであるが、せっかく JR を使って新潟まで来てもらっていても、市として、新潟交通と連携したバスの運行はできない。民間事業者にやってもらい、協力するという形になると思う。

（委員）五頭温泉郷でも、バスの共同運行などについて考えていかないとならないと思う。

（委員）やってみて採算が合わないとやめてしまう、そうするとお客さんも行くことができない、悪循環になってしまう。例えば 1 日 3 回やるとしたら、その回数にあわせてお客さんをどう集客するか、起業していくという発想がないと、やるだけやって、後はお客さんを待っているだけだと採算が合わなくなる。地方によってはコミュニティーバスといってタクシーとバスを組み合わせたような民間のタクシー会社にマイクロバスを運行してもらい、そこに補助金をつけている。それにより無駄がなくなる。

（事務局）交流人口の拡大への取り組みについて、35 年前から首都圏との交流を進めてこられた体験から、この 35 年の流れの中で当時とどう変わってきたか、また今後はどう考えていくべきか、教えていただきたい。

(委員) 35年前と今では産直交流事業のあり方が変わってきている。当時は1つの生協が3000人から4000人だったのですごくコアな交流ができた。今はマンモス化している。現在の農作業体験のツアーは年間4回開催、若い層は、比較的安いという理由で笹神に来ている。コアな人たちはリピーターとして残るが、継続しての交流は少なくなってきた。かつては1000人以上来ていたが、最近は尻つぼみである。若い層は一度は行ってみたいということで来るが、その後につながらない。つながりの意識が昔と今では違うと思う。そこで、我々が今仕掛けているものは生き物。生き物調査をしたり、なぜ有機や自然を守るのかについて根本的な理念から入って、さらに仕掛けを作っていくのが今のやり方。現在、蛸ツアーが好評である。あまり宣伝はしていない。宣伝しすぎて自然を壊されるのが心配なので。特定の、理解のある人たちに来てもらっている。

(委員) 生協としては、人が来ることもそうであるが、物が売れることが成功になる。米も売れるが、その他豆腐なども売れる。総合的に考えると、売れ行きについては昔とまったく違う。実際に、数万人も受け入れられるような受け皿はないが、今年から五頭自然学校にうちの施設を渡し、こちらで管理してもらっている。

(事務局) 受入側として、例えば1万人お願いするといった場合、そちらの方の問題はないのか。

(委員) 魅力があればついてくると思う。我々は食べ物というところに共通の意識があったのでそこでつながった。2月のゆうきの里の火祭りでは、福島の、遊ぶことができない環境の子どもたちに思いきり雪で遊んでもらおうという企画がある。大型バス1台の定員に対し、3倍くらいの希望があって抽選である。我々はもうけではない産直事業であるのが他と違うところだと思う。

(2) その他

(委員) 今回のアンケートを見て感じたことは、阿賀野市は五頭と瓢湖と思っていたが、ヤスダヨーグルトが非常に認知されていて全国的な知名度になっている。我々観光協会としても学ばなければならない部分だと思う。

(委員) ヤスダヨーグルトは次々に新しい商品を発売している。直販店を増やしていきたいと考えているようである。

(委員) 阿賀野市の代弁者を外部に持つということにつながると思う。この会議でも、

そういった戦略を考えていければと思う。

(委員長) 以上をもって本日の会議を終了させていただきます。

3. 開 会

(事務局) 本日はお忙しいところありがとうございました。会議では多くの意見をいただきました。これから情報発信をしていくためには、いろんな媒体があるが人が大切である、応援隊のネットワークで発信してもらうことも大事、また阿賀野市には宝がいっぱいあるので、それをどう生かすかということについても、提案をたくさんいただきました。本日の意見をまとめて、また次回につなげていきたいと思しますのでよろしく願いいたします。ありがとうございました。

問い合わせ先

商工観光課観光係 62-2510 (内線 341)

E-mail syokokanko@city.agano.niigata.jp